作品タイトル　「グラデーション色対比」

村井祐基　東京大学大学院総合文化研究科

E-mail : ymurai@fechner.c.u-tokyo.ac.jp

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 東大駒場キャンパス2号館104号室

解説：

　高い彩度から低い彩度、そして逆の色相の高い彩度へと連続的に彩度が変化する色パターンに対して、彩度が変化する方向に追従眼球運動すると、彩度の低い部分の色相が中心視の色相に偏って知覚される。

　この現象は基本的に色対比（色相対比）のバリエーションであると考えられるが、古典的な色相対比とは明らかに異なる特徴がある。

１）古典的な色対比においては誘導領域・テスト領域の色がそれぞれ一様であるが、この錯視では両者ともグラデーションパターンとなっている。

２）テスト領域の両側に異なる色相の誘導領域を配置することによって、目を向ける場所を変えることで同一のテスト領域が異なる色相に知覚される。しかし、誘導領域・テスト領域がグラデーションではなく一様な色相である場合には、色の見えの変化は起こらない。これは、グラデーションのような視野上の局所の色を決定しにくい状況下において、視覚系が周辺の色を積極的に手がかりにして局所の色を決定しようとするために、対比効果が増幅されるためであると考えられる。

３）色対比において一般的に知られるキルシュマンの法則では、誘導領域に対してテスト領域が小さいほど起こりやすいとされているが (Graham & Brown, 1965)、この錯視のテスト領域（色相が変わって見える領域）はかなり大きいにもかかわらず色の見えの変化は頑健に生じる。

　またこの現象は輝度グラデーションパターンにおける明度対比でも同様に生じる。

参照文献

Graham, C. H. and Brown, J. L. (1965) Color contrast and color appearance: Brightness constancy and color constancy. In C. H. Graham (Ed.), *Vision and Visual Perception*. New York: John Wiley & Sons, pp.452-478.